リレー企画 ＜不思議な夢＞

８番目の語り手

Tomy Jr.

凍りついたように立ち尽くしたメイドの脇をすり抜けたＴ教授が驚いたように彼の名前を呼ぶと、他の人達も立ち上がってこわごわと遠巻きに見ている。しかしＳ婦人だけは予定していた招待客が来たかのように穏やかな笑顔を浮かべながら席に座ったたまま彼をテーブルに手招きした。

「さあさ、Tomy さん、こちらにどうぞ。お待ちしていましたわ」

その男はまるでＳ婦人の言葉に導かれるようにフラフラとテーブルに近づくと、へたり込むように空いていた椅子に座り込んだ。顔はＳ婦人の方を向いているが、その視線は無限の彼方を見つめているようだった。

「そうね、まずはお話の前に何かで喉を潤した方がよさそうね。サマンサ、熱いお茶をお持ちしてちょうだい」

急に声をかけられたメイドのサマンサは、胸に抱えていた銀製のお盆を危うく落としそうになったが、すぐに主人の意図を察し、踵を返して厨房に戻った。

「あ、ああ、どうも、す、すみません。たしかに、喉がカラカラで、す、すみません...」

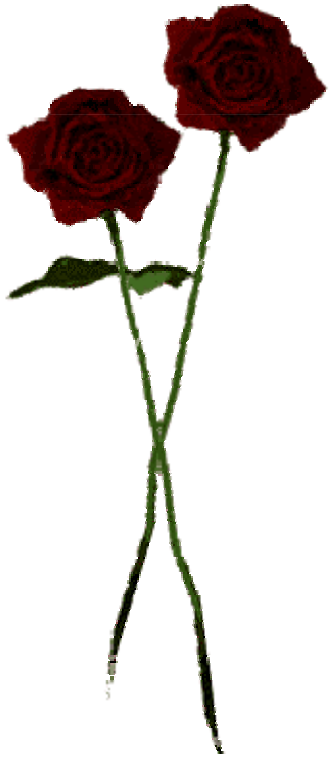
その男が顔をしかめつつもしゃがれた言葉を発し、少し我に帰ったような様子を見せたことで、立ち上がって様子を見ていた周囲の人たちも、ようやくそれぞれの席についた。

ほどなくサマンサが彼の前にティーカップとソーサをセットし、大きな白磁のポットから湯気とともに熱いミルクティーを注ぐと、ほのかに蜂蜜の香りが辺りに漂った。男は震える左手で軽くソーサを押さえながらティーカップを口に運び、ロイヤルミルクティーを三口ほど飲むと、俯いて軽くため息をついた。Ｓ婦人は笑顔のまま、ずっと彼のしぐさを見守りながら、彼が話し始めるタイミングを計るように静かな調子でこう言った。

「きょうは私ね、あなたのお話を聞くのを楽しみにしていたんですのよ、Tomy さん。さて、あなたはいったいどんな夢を見たのかしら」

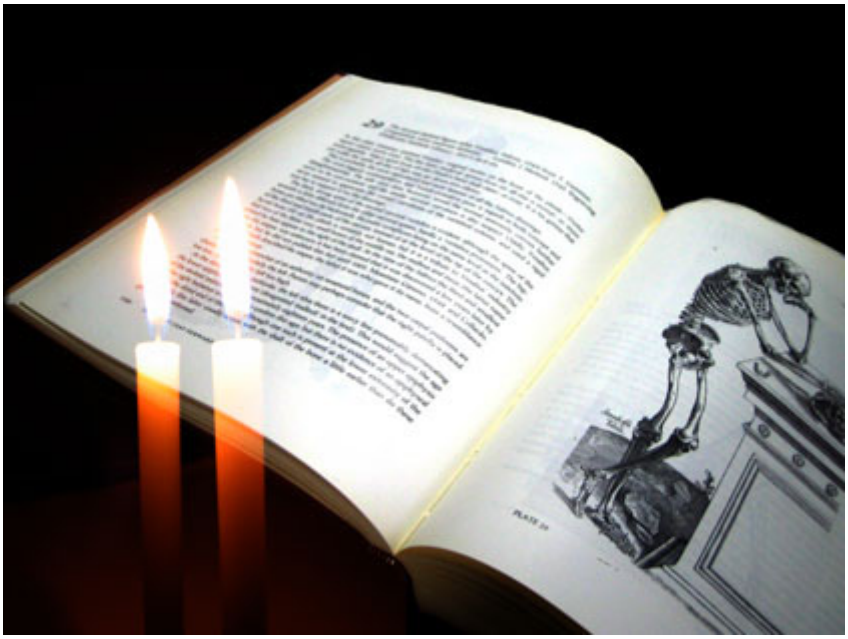
男は両肘をテーブルにつき、両手を広げて顔を覆うように支えながら、こんな話を始めた。

風、だった。それはまさに、山々の尾根を越して木立をわたり湖畔の別荘の風見鶏をくるくると回しては急上昇と急降下を繰り返していた。しかし同時に、それは私のからだ、私そのものでもあった。私は両手を鳶のように広げてははばたき、深遠な森の香りを胸いっぱいに吸い込んで飛び回っていた。ちょうど極彩色の鳥が目の前を横切ろうとするのを避けて急上昇すると、空一面に広がった白い雲を一気に突き抜ける。暫くの間、霧の中をさまようような感覚が続いた後、視界いっぱいに抜けるような青空が広がった。しばらくの間、風を切りながら進んでから下を見ると深い緑色の山の尾根が広がっている。子供の頃に本で見たマチュピチュの空中都市を連想しながら、ふと緑の大地にポツンと立つ一本の大きな木が目に止まった。そして木の根元にブラブラと揺れる影が見えた。「ブランコ、いやハンモックだろうか」気になって急降下をすると、徐々に影の正体が鮮明になってきた。それは女性だった。まだ 30 代と思しき若い女性が首からロープで太い枝にぶら下がって風に揺れていたのだ。しかし、その女性の顔はまるで 5 歳の幼女のようにあどけなくも見えるし、また見ようによっては 90 歳の老婆のようにも見えた。



そのとき、グレイのマントが私の視界に飛び込んできた。一瞬だが、そのマントの奥に深い碧色の瞳が二つ光ったように思った瞬間、頭頂からつま先に向かって凍りつくような冷たい衝撃が走った。同時に瞼には三日月型の銀色の閃光が焼きついた。「鎌だ、大きな鎌が猛烈なスピードで私の身体を切り裂いたのだ！」途端に目の前が真っ赤に染まり何も見えなくなった。私は両手両足で必死にもがき、虚空を掻き毟ったが次の瞬間、ドサッという音とともに地面に叩きつけられた。土と草の匂いそしてほのかにバラの香りが鼻腔をくすぐった。起き上がろうとするが身体中に軋むような痛みが走る。衣服はボロボロにちぎれて両腕は半ば凝固した血に染まっている。それからのことはよく覚えていないが、バラの香りに誘われるように、這いつくばり、よろよろと歩き、湖畔の洋館に向かったようだ。頭の中ではラフマニノフの「パガニーニの主題による狂詩曲」のメロディがリフレインしていた。しっとりした緑の生垣に囲まれたポーチが見えたとき、ピンクとオレンジの混ざり合った優しい色合いのバラが数輪、目に入った。そして徐々に気が遠のいていった。

男がひとしきり語り終えても、しばらくの間、誰も声を発しようとはしなかった。ややあって、T 教授がぽつりとひとこと言った。
「それは、本当に夢だったのかな？いや、どこまでが夢だったのか、という意味なのだが」
黙って俯いている男の代弁をするかのように、Shibasan と呼ばれていた東洋人が答えた。
「私は、今のような話をどこかで聞いたことがあります、というか自分が見たのかも知れない」すると、テーブルの反対側に位置していた hidehiko という東洋人が学者のような語り口で、「それはきっと、魂の原体験のようなものなのかもしれませんね」と語った。
語り終えた男は肘をテーブルに突いて両腕で顔を覆っていたが、どうやら疲れのせいか眠ってしまった様子だ。メープルシロップをかけたスコーンを食べようとしていた C.G.ユング少年が、ふと何かを思い出したように S 婦人の方を向いて尋ねた。
「どうして、この人が話をしにここに来ることが分かっていたの？」S 婦人はティーカップを口に運びながら意味深な笑みを浮かべてこう答えた。
「そうね。それは、彼が夢の中でそうしたいと予め決めていたことだから、かしらね」
C.G.ユング少年は怪訝な表情を浮かべながらさらに質問した。
「え、なんですって？では何故、彼が夢の中で決めていたことを知っていたのです？」
S 婦人は、ふっと小さく笑うと、少年の目を見て、諭すようにゆっくりとこう言った。
「当然、それは知っているわ。だって、私達は皆、彼の夢の中に居るのですもの」
そのとき、赤い首輪をつけた黒猫のミコがあくびをするようにミャーアと鳴いた。



さて、９番目の語り手は、いよいよ由佳さんです。よろしくお願いします。